

リングムの観光学

ーシンガポールのタミル系シヴァ教寺院刊行冊子を資料としてー

正信 公章

I

まずは右の絵を見ていただきたい。小さな女の子が指のお化けみたいな何かにレイのようなものを嬉しそうにかけている。ヒンドゥー寺院を何回か訪れたことがある人なら、その指のお化けのようなものが実はシヴァの御神体であり、今まさに花づなが捧げられようとしているところであることを理解するだろう。さらに、この御神体がリングム（もしくはシヴァリングム）と呼ばれる石であり、通常は、受け皿に対して直角になるようにつくられていることを知っている人であれば、頭を低く差し伸べるかのようなリングムの格好に親しみを覚えるかも知れない。



シンガポールの寺院刊行冊子より

それにしても、ここに描かれるのは一種異様な光景である。「リングム」すなわちサンスクリット (skt.) でいうところの「リング」(linga) は本来、＜徴(しるし)＞、＜男性の徴＞、＜文法上の性別＞などを意味しており、また、受け皿部分の呼び名である「ヨーニ」(skt.yoni) が一般に＜子宮＞を意味することからも、リングムが、雄々しく直立する男性(勇猛神シヴァ)のシンボルを形にしたものであること一神の皮相な理解を拒むヒンドゥーがそれを否定するということはあるにしても一に疑いの余地はない。そのリングムが傾いているというのはやはり、ただならぬ事態なのである。

では、本来真っ直ぐ立つべきリングムがそうすることをやめているのは一体なぜか。これを解く鍵は絵の中にある。よく見ると、女の子のお尻が半分のぞいているのがわかる。この部分が実はポイントなのである。ここでまず、この絵のもととなった話をみていくことから始めることにしよう。

II

シンガポール北部のウッドランズ地区に、リングムを祀るスリー・アラサケーサリ・シヴァン・テンプルという名のタミル系シヴァ教寺院がある。先程の絵は、この寺院が最近建物の改修を祝って出した記念冊子から採ったものであり、隣の頁には先の話が「傾いて、真っ直ぐになった神」(vaḷaintu nimirnta perumāṇ) という標題のもとにタミル語の文章で掲載されている¹⁾。冊子にはこの話の編者も出典も明らかにされておらず、その内容から中世のタミル聖者伝の流れを汲むものかと思われるが、今はその点はおく。

話は、熱心な信者であるカラヤルという男に起こった一つめの不思議を説く前半と、聖者と呼ばれるようになった彼に起こったもう一つの不思議を説く後半の二つに分かれる。ここでは絵解きに直接かかわる後半部の全体を以下に訳文の形で示すことにする（各段落の区分番号は筆者による）。

チョーラ国³⁾のティルッパナンダール³⁾という謂れのある土地に、センジャダイヤッパル⁴⁾という尊名で神はおでまし下さっている。そこで供養職をつとめていたアーディサイヴァル（シヴァに奉仕する司祭身分の人）が、ある日、よその村に出かけて〔留守にして〕いなさった。その日、その人の妻は、自分のたった一人の娘⁵⁾であった小さな女〔の子〕に、神像供養に必要なものを〔幾つか〕与えて、供養をしてくるよう〔お堂に〕やった。その女〔の子〕の名はターダガイ。①

腰布を着ける年頃⁶⁾であったその女〔の子〕は、その当日、それらのものを持っていて〔リングムに〕に灌頂（沐浴させる所作）をした。〔が、〕花づなを〔リングムに〕かけよう⁷⁾とした⁸⁾とき、その子の腰布がずったのである。恥じらいは女とともに生まれた特質⁹⁾であるが故に、〔その子は〕それを〔両〕ひじで押さえたままだった。〔で、〕高くなっていたシヴァリングムに花づなをのせることができない。ちょっと〔その子は〕とまどった。それを見かねた神がなんと前に傾いたのである。その花づなをターダガイは神にちゃんとかける¹⁰⁾ことができた。②

傾いたリングムは真っ直ぐにならなかった。次の日やって来た供養職は、前日起こったことを目にして驚きなさった。それで、傾いたリングムに供養するようなことはまともなやり方ではないと心配なさった。必要な人数を呼び集めて、真っ直ぐにしようとやってみなさった。〔が、〕できない。この出来事はチョーラ王の知るところとなった。シヴァリングムのぐるりに絹布¹¹⁾を〔何枚か〕かけて、その上に鎖を〔何本か〕かけて、象たちをつかって引くように〔王は〕させた。〔が、〕リングムは真っ直ぐにならない。國中〔の人間〕が集まってしまった。③

この出来事をクングリヤ・カラヤ・ナーヤナール（「樹脂香¹²⁾〔を神に捧げつづけた〕カラヤルというシヴァ教聖者」）が聞きつけなさった。ティルッパナンダールにやって来なさった。王に説いて、鎖をはじめとするものをのけるように言いなさった。その人の意図を察知した王はちゃんとそのとおりにした。④

クングリヤ・カラヤルは1本の鐘ひも¹³⁾を買ってくるように言いなさった。その一つの端をシヴァリングムのぐるりに結わえなさった。もう一つの端を自分の首のところで締まるように取えてなさった。「私の神よ、私がまことの、愛を捧げる〔しもべ〕であるなら、〔その証として〕おまえが真っ直ぐになって下さるのが望み。違うなら、私の命がなくなるのは望むところ。」と言って首を真っ直ぐに伸ばして、引くことにとりかかりなさった。何たる不思議！次の瞬間¹⁴⁾シヴァリングムはちゃんと真っ直ぐになった。王もほかの者たちもともに喚声を上げた。クングリヤ・カラヤ・ナーヤナールの〔スケールの〕大きさはさらに¹⁴⁾増したのである。⑤

ターダガイが神像供養をした謂れのある土地であることから、[その地] ティルッパナンダールのお堂にターダガイ・イーッチャラム（「ターダガイの神の[殿堂]」）という名が起こった。⑥

かくして我々は、腰の帯ひもがゆるんだ女[の子]のために傾いてやるような神自身を隣側[の頁]に見る[ことになる]。⑦

III

リングムのことが語られるこの後半部は、訳文から明らかなように二つの話を中心になっている。リングムが傾いた話（①～②）と再び真っ直ぐになった話（③～⑤）である。初めの話が絵になっていることは、末尾の説明（⑦）にあるとおりである。では最初に出しておいた問いを繰り返そう。リングムが真っ直ぐに立つことをやめたのはなぜか。文章に即する限り、それは神が「見かねた」（②）からである。何を見かねたのか。腰布がずってのぞいたお尻をではない。そのお尻を隠そうとすれば思いを遂げることができないその子の困った様子を「見かねた」のである。だが、この子の予期しなかった事態がはたして本当に、神を動かす（文字どおりの意味で）ほどの意味をもつのだろうか。

リングムがなぜ動いたのかを考えるためには、リングムがなぜ動かなかったのかをあわせて考えることが必要である。二つめの話の中で、供養職にリングムを動かすことができなかったのは、彼が「まともなやり方」（③）にこだわったからである。王に同じことができなかったのは、彼が力（③の「鎖」、「象」）を用いたからである。二人に欠けていたものは何か。それは、カラヤルがしたように自分の「命」（⑤）を賭けることがなかったということである。

ターダガイの場合はどうか。無論この子に聖者のまねはできない。しかし彼女には確かに「とまど」い（②）一時間はこの場合問題ではない—がみえる。彼女は恥じらいから、ずり落ちかけた腰布を押さえている。思いを遂げようとすれば、押さえている両ひじを腰布からどけねばならない。恥じらいを捨て去ることは女が女でなくなることを意味する。

「恥じらいは女とともに生まれた特質」（②）と挿まれるとおりである。彼女をさして、まだほんの子供ではないかと言うことはできない。それは、彼女が女の第一段階ともいうべき「腰布を着ける年頃」⁶⁾（②）になっているというだけの理由からではない。話の作者は、彼女を普通名詞で指し示すときはすべて、ごく普通に「女」を意味する *peṇ* を用いている。「女[の子]」と訳した部分（①、②、⑦に計4か所）がそれである。これは作者がターダガイを一貫して「女」とみているからにほかならない。（「」の部分を取り去って、もう一度その前後を読んでいただきたい。「その子」は単に女性人称代名詞、女性人称語尾を訳したものにすぎない。）つまりここで彼女は、女としての生存を賭けなければならない重大な局面に立たされているのである。これが「生死」にかかわる事態—繰り返し言うが時間は問題ではない—でなくて何であろうか。それが、動かない筈の神を動かした本当の理由である。

自分の命を賭けて神と向きあったカラヤルは、話の前半部でも、貧困や家族の餓えをものともせず、神への薫香奉仕を貫いた「シヴァへの献身者」（*civapaktar, skt. śivabhakta*）と

して、あるいは、その徹底した「献身ぶり」(pakti,skt.bhakti) が国中を驚かせた聖者として描かれている。彼はいわば献身者の鑑である。だが通常、我が身を捧げることほど難しいことはない。大方の人間にとって我が身は捧げるものではなく守るものだからである。＜我が身＞は体や命ばかりではない。我が身を我が身たらしめている生き方である。「まともなやり方」を問題にしない供養職はもはや供養職ではなく、力を示さない王はもはや王ではない。だから彼らはやり方にこだわり、力を用いて＜我が身＞を守る。そして神に拒絶されるのである。

リングムは確かに人を選んでいる。そこには一つの思想がある。しかし見落としてならないのは、そのリングムが未熟な献身者に対しても感応しているということである。この場合、神は報いたわけではない。ただ恵みを与えたのである。つまり、神は献身者に示すべきそれまでの身のあり方を幾分崩したのである。それが「傾いた」ということの意味であり、聖者がそれを元に戻そうとした考えられるただ一つの理由である。弱い一人の人間が懸命に自分と戦っている一神にはそれで十分だったのである。

わかったのは、リングムがただの石ではないということである。リングムには思想があり、感応があり、ときには恵みがある。ヒンドゥーにとって、リングムを見るときは拝観すること (taricanam,skt.darśana) を意味する。筆者もせめて、リングムの放つ光がいささかでも感じとれるような、そんな文字どおりの観「光」の旅がしたいものである。

注

1) Narayanan 1996,32 - 33。

2) チョーラ国 (cōḷanāṭu) は南インド、現タミル・ナードゥ州のカーヴェーリ河下流域を中心とする一帯に相当し、9～11世紀にでた有能な諸王（なかでも有名なのがラージャラージャ1世）が勢力を周辺に拡大したことで知られる。ただし、話の中にはシヴァ教63聖者の一人が登場していることから、ここで語られる時代は彼らがでた6～8世紀頃、つまり先の拡大期より前である。

3) 同名とみられる土地が、王都のあった現タンジャーヴール県にある (Bhatt 1999,1258r,英語表記で Thiruppanandal) が、未詳。意味は「神聖な、多羅ヤシの根元（／切り株？）」（tiru-p-panan-tāl）か。

4) 未詳。意味は「赤い巻き上げ髪 of 尊き父」(ceñ-caṭai-y-appar) か。巻き上げ髪 (caṭai,skt.jaṭā) は苦行神シヴァの特徴的髪形。

5) 本来なら父親の代わりは息子がつとめるべきことを示唆するか。

6) 腰布 (pāvāṭai) は、⑦の「腰の帯ひもがゆるんだ」(kalai-y-aviḷnta) という言い方や絵の描写から、腰に巻いた布の上端部を、締めた帯ひもにそわせて挟み込むという仕方で着けられたと判断される。従って、直後にも「ずった」(naḷuviyatu) とあるように、背伸びをする、跳び上がるなどの無理な体勢や激しい動きには不向きな衣類であり、これを身につけるのはやや成長してからということになる。女性の「年」(paruvam,cf.skt.parvan) の分け方には4、6、7分法がある (Winslow) が、いま7分法によって説明すれば、ターダガイは幼児期を過ぎた最初の段階 (pētai, 5～7歳) にあるかと思われる。現代南インドのパールヴァーダイの御転婆抑制効果については、辛島 1988,79 に記述がある。

- 7) 原文の *cārra*-,*cārri* をそれぞれ *cātta*-,*cātti* の意味で読む。
- 8) 毎日執り行われる供養儀礼 (*pūcai*,*skt.pūjā*) は、神像 (ここではリングム) に体现される神に対し、きまった時間にさまざまなものを献じて身のまわりの世話をする、一連の所作の総体である。ここでの供養の規模は、水、花、香、灯明、簡単な食事を献ずるといった程度のものかと思われるが、沐浴→身ごしらえ→食事といった儀礼の基本的プロセスは、灌頂 (*apiṣēkam*,*skt.abhiṣeka*) →花づな (*mālai*,*skt.mālā*) [→食事] という形で踏まえられている。
- 9) 女性の「特質」(*kuṇam*,*skt.guṇa*) として、「恥じらい」(*nāṇam*)、「単純」(*maṭam*)、「臆病」(*accam*)、「繊細」(*payirppu*) の4つがこの順に列挙される (Winslow)。
- 10) 絹布 (*paṭṭu*,*cf.skt.paṭṭa*) がとくに使われているのは敬意のしるしである。同じ冊子に収められている寺院作法集には<衣服> (*vastiram*,*skt.vastra*) の項で、シヴァ神には白の絹布を着せかけることが望ましいとされており (Narayanan 1996,21)、大きな寺院で供養をうけるリングムであれば、その時点で花づなのほかに絹布を身につけていてもおかしくない。
- 11) 原文の表記は *kuṅkuliyaṁ* (*cf.skt.guggulu*) ,*kuṅkiliyaṁ*,*kuṅkukiliyaṁ*(?) と一定しない。ちなみに「樹脂香」は話の前半部で *cāmpirāṇi* (「安息香」か) と説明される。
- 12) *maṇi-k-kayiru*。TL の与える意味 (*kaṇṭāmaṇiyai ilutt-aṭikkun kayiru* 「[寺などの] 鐘を、引いて打つひも」) をとる。
- 13) 原文の *taṇam* を *kaṇam* (*skt.kṣaṇa*) で読む。
- 14) この聖者の信仰の威力 (本文で述べた一つめの不思議) を説く、話の前半部を受けている。

テキスト

M.K.Narayanan (ed.), Sri Arasakesari Sivan Temple, Cons[er]vation Ceremony 25-04-1996, Souvenir Magazine, Singapore 1996.

参考文献

M.Winslow, A Comprehensive Tamil and English Dictionary of High and Low Tamil, Madras 1862 (Reprint: Winslow's A Comprehensive Tamil and English Dictionary, New Delhi 1998).
University of Madras, Tamil Lexicon (TL), Madras 1924-36; Supplement, Madras 1939. (Reprint, 1982)
辛島貴子, 「家族と生活」, 白田雅之ほか編『もっと知りたいインド』Ⅱ, 弘文堂 1988, 59-85.
S.C.Bhatt (ed.), The Encyclopaedic District Gazetteers of India, Vol.2, New Delhi 1999.

(アジア文化学科・教授)

アジア観光学年報 創刊号

下記の箇所には誤りがありましたので、訂正いたします。(2010.7.19)

正誤表

誤

正

123頁28行目

Lexion

→

Lexicon